

私が生まれたとき、周りには無数の仲間がいた。それはそうだろう。鯉は一度に十萬個以上の卵を産む。何匹もの鯉が産卵すれば、卵の総数は何十萬あるいは何百万個になるだろう。その一部が死滅するにしても、膨大な数の稚魚が出現することになる。鯉は産んだ卵を守らないので、私が生まれたときに、両親はどこかへ消えていた。正確に言えば、親鯉によって卵が食べられないように、産卵した親鯉は別の池に移動させられていた。だから、私は自分の親がどのような鯉なのか、まったくわからなかった。若い鯉なのか何十年も生きた鯉なのか、どのような模様を持っているのかなど、今となっては知る術はなかった。

生まれたばかりの魚はミジンコを食べる。私の飼い主は、鯉養殖のベテランであり、糞と醬油粕を上手に散布して、大量のミジンコを発生させていた。私はただひたすら口を動かして、ミジンコを食べまくった。少しでも大きくならないと、ほかの鯉に食べられてしまうからだ。

ミジンコを食べつくした頃になると、今度は配合飼料が与えられた。給餌器から撒かれる飼料を私は必死に漁った。餌を食べ損ねて少しでも弱ると、ほかの鯉に押し負けて餌を食べられなくなり、さらに弱っていくだけの運命となる。痩せこけた稚魚は死ぬしかない。それでも生き残った稚魚は大事に扱われた。優しそうな飼い主は、ときどき餌を手で撒きながら、「いい鯉になれよ」と言った。とくに飼い主は私に目をかけているように思われた。

あるときに、飼い主は目をつけた鯉に勝手に名前をつけていた。「おまえは白色が綺麗だから白眉だ」、「この鯉は将来品評会で優勝するかもしれないから横綱だ」、「こいつ、今はパツとしないが、将来どんどん良くなるかもしれない。だから大器晩成と呼んでやる」といったぐあいだ。そして、私を初めて見たときに、「なんだか鯉らしい鯉だな、堂々としているから、おまえは鯉太郎だ」と言ったのである。それから、私は自分でも鯉太郎と名乗ることにした。

鯉太郎の池には同じ時期に産まれた鯉だけが收容されていた。その中で鯉太郎は大きな方であり、餌をめぐるって押し合っても簡単には負けなかった。それでも、もっとも大きな奴は鯉太郎を押しつけ、ひととき小さな鯉を食べようとした。

そんなときに飼い主は網をもってきて、大きな鯉を捕り始めた。鯉太郎は捕まったらど

うなるのかわからないので、捕まらないようにひたすら逃げたが、飼い主は鯉太郎を捕ろうとはしなかった。そこまで鯉太郎は大きくなかったからである。

「捕まったらどうなるのだろう」と鯉太郎が思わず呟くと、「飼い主に食べられるんだよ。猫の餌になるかもしれない。あるいは煮てから犬にやるのかもしれない。それこそ犬死だな」という声があった。びっくりして横を見ると、鯉太郎と同じくらいの大きさの鯉が、笑っていた。「俺たちは大丈夫のようだな。ひとまず安心だ」

魚は互いに会話することができる。とくに鯉は長い間、人間に飼育されてきたので、人間の言葉を理解することもできる。ただし、魚どうしが会話したり、人間の言葉を理解したりすることを、人間は知らない。彼らは、知能や言語は人間だけのものだと思っている。ので、魚が口を開けても、ただ餌が欲しくて口をぱくぱくさせているのだと考えている。口やのどを使って魚が出す音を理解しようとはしない。

「どうして食べられてしまうのだ？」と鯉太郎が訊くと、「ほかの鯉を食べたり、ほかの鯉の食物を独り占めしたりするような鯉は取り除いたほうがいいんだよ」という答が返ってきた。

「俺は鯉太郎だ。おまえの名前はなんていうんだ？」

「鯉だから鯉太郎というのは安易な名前だな。芸人からキャラクターまで鯉太郎という名前はよく聞けるけれども、大物はいないな。俺は令和三色だ」

「令和三色って、何のことだ？」

「赤、白、黒の模様が配置されている鯉を三色と呼ぶだろう。昭和三色と大正三色はよく知られているが、俺は令和時代を象徴する新しい三色になることが期待されているんだ。将来が有望だということだ」

「なんでもいいけれども、これから俺たちはどうなるのだろうか？」

「今回は生き残ったが、これからは俺たちの錦鯉としての価値が運命を決めるのだ」

「錦鯉としての価値？」

「そうだ、俺たちの体のバランス、模様の濃さや配置が人間にとって美しく生き残ることができる。ただ、この美しさというのがむずかしい。君は紅白という、錦鯉でもっとも格式のある品種に分けられる。だが赤い模様があればいいというものではない。赤色の濃さと美しさ、白色とのバランス、そして赤い模様がどう配置されているかが重要だ。それに、俺たちはまだ発育期にあるから、大きくなるにつれて模様もどんどん変わっていく。色が際立つこともあれば、消えてしまうこともある。飼い主はそれをじっくりと観察

し、選別するつもりだ」

「どうしたらよい錦鯉になれるんだ？」

「それはむずかしい。しつかり餌を食べること、ストレスなしで伸び伸びと育つことが重要だが、遺伝の影響もあるから、どうしようもないこともある」

自分の色や模様がこれからどう変化するのかは予想できないのだ。それならば、自分の運命もわからないということだ。わからないことをくよくよ考えてもしようがない。ともかく、与えられた餌をできるだけ多く食べて、成長することだけを考えよう。ただし、大きくなりすぎると目をつけられて間引かれてしまうかもしれない。目立たぬように大きくすることが肝要だ。そう思った鯉太郎は、飼い主が池を見回る時には、水草や岩の下に隠れて見つからないように心掛けた。

令和三色によると、鯉太郎には赤い模様が三か所にあるらしい。一つは頭頂部、二つ目は背びれの周り、そして三つめは尾びれに近い背中。

「確かにおまえの模様は完璧だ。背中に三つの赤い模様があるのが、紅白鯉の理想だと言われている。しかし、これから成長すると、模様は小さくなったり、薄くなったりするんだ。それまでになかったシミや黒点が突然現れることもある。だから、いま理想的な模様を持っていても、それが消えてしまうこともある」

令和三色は人間の会話から、錦鯉の模様の変化について学習したようだ。それにしても、同じ稚魚なのに、なんでも知っているかのような態度は腹立たしい。

令和三色に鯉太郎は言い返した。

「それなら君の模様はどうなんだ。令和三色なんて聞いたことがないぞ」

「三色は赤と白だけでなく、黒の模様が美しい鯉のことだ。俺の黒は背中の中真ん中に大きく一つだけあり、これまでの大正三色や昭和三色とはちがうから、新しい三色鯉になるつもりだ」

そう言う令和三色に対して、周りの鯉たちは「ちょっと変わっているだけで、令和三色になれるわけがないだろう。だいたい三色のバランスが悪い。すぐに捨てられるに決まっている」と言った。とくに鯉太郎や令和三色より少し大きくなって、餌をとるときにいつも鯉太郎を押しつけようとする鯉は大笑いした。この鯉は、頭頂部にだけ赤い模様があり、丹頂と呼ばれていた。

「おまえらチビ鯉の模様なんて、これからどんどん変わっていく。今の段階で問題となるのは、体が曲がっていること、模様が薄いこととそのバランスが悪いことだ。その点、俺

の体と模様は完璧だ」

鯉たちの議論を聞いていて、鯉太郎はうんざりとしてきた。模様がどうであろうと、自分分は自分だ。他の鯉にあれこれと言われたくない。

その一週間後、鯉太郎たちは一回目の選別試験を受けることになった。池の中を網で引かれて、ほとんどの鯉は池の一端に集められたが、なかには捕まらないように網を巧みに潜り抜けた鯉もいた。

「捕まらないと、そのまま水を干されて鳥の餌になってしまいかもしれない」と令和三色が言うので、鯉太郎は素直に捕まることにした。ふだんから周りの鯉たちを見ていた鯉太郎は、自分の模様がほかの鯉と比べてそんな色ないと思っていたからだ。周りの鯉の中には、真っ黒なままの鯉や、赤色の模様のまったくない鯉がいた。たとえ模様があっても体の一部にしかなかったり、色が薄かったりする鯉もいた。体がいびつで、寸詰まりになっている鯉もいた。最初に選別されるのは、そういう鯉たちだろうと思った。

飼い主は捕獲した鯉をたらいに泳がせながら、片っ端から出来の悪い鯉を取り除いていた。除かれた鯉は大きなバケツにたまっていた。

「あの鯉たちはどうなるのかなあ」と鯉太郎が訊くと、「あそこまで出来が悪いと、これ以上餌を与えるのは無駄だと判断されたんだろう。やはりペットの餌になるんだろうね」と令和三色が答えた。令和三色も生き残ったようだ。

「せめて川や池に放流してやればいいのに……」

「そうだなあ、昔だったら放流されたかもしれないけれども、最近、鯉は外来魚だから、むやみに放流してはいけないことになっているんだ」

「外来魚？」

「俺たちの先祖は中国から持ち込まれたらしい。それに錦鯉は日本でつくられた人工品種だから、なおさら自然の生態系に放流するのはまずいらしいんだ」

「それならば、俺たちにとって最善な生き方とはなんだろうか？」

「それはお金持ちに買ってもらって、環境の良い池で十分な餌をもらって長生きすることだろう。うまくいけば百年以上生きることできるらしい」

鯉太郎は今棲んでいるこの池しか知らないの、それほど環境の良い池がどのようなのか想像がつかなかった。ともかく、生き残って立派な鯉になりたいと思った。

選別が終わったのち、池はいくらか空いていた。確かに色や形の悪い鯉は見かけなくな

っていた。とりあえず、しばらくは安心だなと思っていたら、いきなり大きな鳥がやってきて、池の一端で仲間を漁り始めた。令和三色が慌てて「逃げろ、アオサギだ」と言って、鯉太郎を深みに誘導してくれた。

「アオサギって鯉を食べるのか？」

「あいつは魚でもカエルでもザリガニでも、なんでも襲うんだ。ただ、深いところには潜れないから、ともかく遠ざかって深いところに逃げ込むんだ」

池の周りには網がはってあるのだが、一部は目の粗いところがあり、そこから鳥が侵入してくることがある。アオサギだけでない。カワセミやカワウがやってくることもある。

「飼い主はどうして防いでくれないのだ？」

「俺たちはまだ安い鯉だから、防衛もいい加減なんだ。のろまだったり、死にかけだったりする鯉は食われたほうがいいと思っっているのかもしれない」

そうこうするうちに、飼い主の犬がやってきてアオサギに吠えかかり、アオサギは逃げた。これで一安心だ。

「あの犬は俺たちを守ってくれるのでありがたい」と鯉太郎が言うと、令和三色は「犬はいいけれども、猫には要注意だ。夜にやってきて、こっそり鯉を捕まえようとする」と言った。

「猫が池に入るのか？」

「いや、この猫は池の端に片足をかけて、さかさまになって両手で鯉を捕まえるんだ。俺は何度も見たことがある。だから、ともかく餌をもらうとき以外は深いところにいるのが安心だ」

鯉太郎は何も気が付かない自分を恥じた。こんなことでは、これから遭遇するさまざまな困難に打ち勝つことはできないかもしれない。もっと、しっかり生きていかないと、錦鯉として選ばれる前にくたばってしまう。

夏が近づいてきた。太陽が眩しいが、その光が当たることによって、池の中の悪い菌は死滅してしまう。気温は高くても、鯉の池には地下水が流されており、鯉太郎にとって水温や水質は快適だった。

それから一か月経って、二回目の選抜が始まった。今回は池の鯉は二十尾ずつタライに移され、それを眺めた飼い主はおよそ十尾を飼い続ける群に、残りの十尾を処分する群に分けていった。今回の判別の基準は、赤色の濃さと模様のバランスだった。

判別される鯉を見ながら、自分は残されると鯉太郎は確信した。鯉太郎の赤はしだいに

明確になっており、体の三か所に美しいバランスで並んでいた。それに対して、体中が赤色になっていたり、その色が薄く、橙色になっていたりする鯉ははじかれるだろうと思っただ。そして、実際に鯉太郎は飼いつける群に分けられた。令和三色はどうだろうかと見回すと、令和三色も処分されずに残っていた。

「君も残ったのか、嬉しいよ」と鯉太郎が言うと、令和三色は「上から目線だな。俺のほうが価値のある鯉だ。おまえにそんなことを言われる筋合いはない」と反発した。

令和三色の一番の問題点は、強気すぎることはないだろうか。素直な鯉のほうが飼いに好かれるに決まっている。その点で、令和三色は性格が悪いように思われた。

「今回、処分される鯉はどこへ行くのだろうか？」と鯉太郎が話題を変えて訊くと、

「だいぶ大きくなってきたから、金魚すくい用に売られるかもしれないな」と令和三色は答えた。

「金魚すくいですべて錦鯉が必要なのだ？」

「金魚の中に錦鯉を混ぜると喜ばれるんだよ。錦鯉としての価値は問題ではない。金魚でないことが重要なんだ。大きめの錦鯉は、金魚すくいのポイと呼ばれるタモを壊してくれるだろう。なにしろ、うすい紙を貼っているから、大きな魚がのつかると破れるんだ。まあ、そこが金魚すくいのだいご味なんだけど、何事にも欲張りな人間はいるもんだ。大きな錦鯉を捕まえて自慢しようとするから失敗するんだよ。そうすると、次のポイを買って、さらに挑戦しようとする。金魚屋の思うつぼだな」

「捕まった鯉はどうなるんだ？」

「鯉にしても金魚にしても、家に持って帰るだろう。とくに子供は家で飼うと言うけれども、魚の飼い方を知らないから、じきに死んでしまうだろう。酸素が足らなかつたり、餌をやりすぎて水質を悪化させたり、飼い猫に食われたり、いろいろな原因がある」

「やっぱり、捕まえられなくて残ったのは成功なんだな」

「それでも、これから何回も選抜がある。それに勝ち残ることができるのは、ごく一部の鯉だけだ。ただし、最後のほうまで残ることができれば、それだけ魅力があるということだから、食べられたり捨てられたりすることはないだろう」

令和三色は飼い主やその弟子が話をしていると、必ずその近くに寄って、会話を聴いていた。人間の会話を理解するのはむずかしいけれども、鯉太郎ももっと人間の言うことを聞くようにしようと思った。

その日から鯉太郎は周りで泳ぐ錦鯉たちが気になって仕方がなかった。とくに、鯉太郎

と同じ紅白模様の鯉を見ると、自分より美しいかどうか気になった。その中で、赤い模様がひとときわ美しい紅白の鯉がいた。ほかの鯉は自分と比べて優れていると思わなかった鯉太郎であったが、その鯉には負けていると思った。泳ぎ方もゆったりとして品があった。いつも微笑んでいるように優雅で愛らしかった。

ある日、鯉太郎は思い切って、その美しい鯉に声をかけてみた。

「あの一、私は鯉太郎というものですが、あなたはとても美しい模様をもっておられますね。うらやましいです」

その鯉は少しびびくりしたように見えたが、すぐに鯉太郎に微笑みながら、

「褒めてくださってありがとうございます。でも、あなたの紅白のほうが美しいと思いますよ。私なんかはたいしたことはありません」

なんて謙虚なのだろう、令和三色とは大違いだ。その鯉は美しいだけでなく、性格も良いことがわかった。性格が良いと、模様もさらに輝くのだろうか。

「それに、今、色合いがよくても、成長とともに変わることがあり、色が消えたり薄くなったりすることもあるようです。私はメスですが、あなたはオスのようですね。繁殖するまでは、オスのほうが綺麗になると聞いたことがあります。このまま立派なオスに成長してください」

「ありがとうございます。あなたとお友達になりたいです。あなたの名前を教えてください」

「私には名前などありません。無名の錦鯉なんです」

「それでは私に名前をつけさせてください。：そうだ、赤が美しいから、赤美というのはどうでしょうか」

「名前をつけてくださるなら、嬉しいです。これからは赤美と呼んでください」

その日から、鯉太郎は赤美のあとばかり追いかけるようになった。令和三色が近づいてきても、話をすることを避け、赤美に夢中になった。そして、いつか赤美とともに優秀な錦鯉に選抜されて、親鯉として赤美と子供を作りたいと思うようになった。

ある日、飼い主が池の端にやってきて、錦鯉をじっくりと眺めていた。当初は数万尾もいた錦鯉も選抜を経て、千尾ほどに減っていた。飼い主は選抜をするのではなく、餌を撒きながら、近寄ってくる鯉たちを見比べていた。

そこへ若い男がやってきた。

「どうですか、師匠、いい鯉はいますか？」

「この中から品評会で受賞するような鯉が出てくれると嬉しいのだが、どうだろうね」

「全日本品評会での優勝は師匠の夢ですね。まあ、そこまでいなくても、外国のバイヤーに買ってもらったら嬉しいですね」

「このところ、タイやベトナムから買いに来るからな。錦鯉は富の象徴になっているらしい。日本のバブルの時みたいだな」

餌をもらおうと必死に集まる鯉太郎たちを横目に、飼い主と弟子は笑っていた。

「あの鯉、美しいですね。赤色がひととき濃くて、模様がはっきりしている」

若い男が指さしたのは赤美だった。

「そうだなあ、ただちょっと模様がまとまりすぎているなあ。今の時点でもまとまっていると、しだいにだめになることが多いんだ。ちょっと乱雑で、赤が多すぎるほうが将来輝くことが多い」

「そういうものですか。そのあたりの見極めがむずかしいですね。ところで、オスとメスではどっちが有望ですか？」

性的話になったので、鯉太郎はいつそう注意を集中させた。

「それも簡単には決められないな。メスのほうがふくよかで、大きく成長し、体の幅も大きくなると言われているが、小さなうちはオスのほうが綺麗だと言う人もいる。ただ、繁殖に参加させると、オスはいっそう細くなり、錦鯉としてはだめになる。オスだけで飼育して、繁殖させなければいいのだが、そうすると性転換してメスになる鯉もいる」

「どうして性転換するのですか？」

「メスがいないと子孫を残せないからだろう。それに体が大きくなると、つくることができる卵も膨大になるから、子孫を残すうえで有利になるはずだ」

鯉太郎は飼い主の言葉を聞き漏らすまいとして、いつそう近くによって口を大きく開けてみた。

「あっ、この口を大きく開けている鯉もいいではないですか？」

弟子に言われて、鯉太郎に目をやった飼い主は、「そうだなあ、模様がいいから鯉太郎という名前をつけたんだが、ちょっと品がないなあ。もう少しゆったりと泳がないと、品評会では落第だな」と言って笑った。鯉太郎と同じように飼い主に近づこうとしていた令和三色については、何も言わなかった。

その日から鯉太郎は飼い主が見ているときには、あえて近づかずに、ゆったりと泳ぐようにした。一方で、給餌器から餌が投入されている場合には、我先に突入して、他の鯉よ

りも多くの餌を口に入れるように頑張った。

整いすぎた模様はダメになるという飼い主の言葉も、鯉太郎の頭から消えなかった。赤い模様がいずれ薄くなったり消えたりすることを考えると、濃い赤色が広くあるほうが、紅白の錦鯉として有望なのだろうか。その視点で周りを見回すと、強力なライバルが何尾もいることに気が付いた。しかし、模様の変化は自分でコントロールすることができない。生まれつきの遺伝によって決まっているのだとしたら、将来の不確定なことを想像してよくよすることは、ストレスを高めることになる。ストレスが高くなると、健康や模様にも悪い影響が及ぶかもしれない。ただ餌を求めていた稚魚の頃とは異なり、鯉太郎の心は複雑に揺れ動いていた。

秋までに二回の選抜があったが、鯉太郎も令和三色も赤美も残っていた。周りには三百尾ほどの錦鯉が泳いでおり、さすがにどの鯉も美しかった。その中で赤美の模様はますます輝き、体は一段と大きくなって気品が漂っていた。一方で、令和三色は頭の大きさに比べて、体が細いように思われた。そして、鯉太郎の赤い模様のうち、頭頂部の赤が少しだけ薄くなっていった。

「模様が薄くなっている。どうしたらよいだろうか？」

鯉太郎が令和三色に問いかけると、「模様は遺伝で決まるから、どうにもならないよ。おまえの赤はいずれ消えてしまうのではないか」という返事が返ってきた。むかついた鯉太郎は、「令和三色の体は細すぎて品がない。これでは次の選抜で落とされるだろう」と言っただけでやめた。令和三色は自分でも気がついていたのである。「くそっ」と言って鯉太郎から遠く去っていった。

池の向こう側には大きなガラス板が貼ってあり、そこに映る自分の姿を確認することができた。なぜガラス板が貼ってあるかといえば、鯉を買いに来た客に池全体が華やかに見える効果を狙ったらしい。百尾しかいない池でも、鏡の効果で二百尾泳いでいるように見えるのだろうか。一方で、そのガラス板は鯉たちに自分の姿を見せつけることになり、とくに模様が劣化したり体形が乱れたりした鯉に失望をもたらすことになる。

模様がうすくなり部分的に消えることは、それまで赤の部分が多すぎて、模様にめりはりがなかった鯉にとっては価値を高めることになる。一方、それまで十分に美しかった鯉にとっては、丸く美しい模様が歪んだり、赤色の部分が減って全体として白っぽくなったりする恐れがある。

鯉太郎が一日中ガラス板に映る自分を見ていると、令和三色が泣きそうな表情をして近

寄ってきた。「どうしたんだ」と訊くと、「背中黒い模様が消えそうになっている」と令和三色は答えた。

黒が消えれば、令和三色は紅白になるわけだが、赤色の部分は少なく、そのバランスも悪いように思われた。令和三色はガラス板で自分の姿を見るのも嫌になって、池の隅でじっと動かなくなった。

次の選抜の日、鯉太郎は令和三色に、これまでいろいろなことを教えてくれたことを感謝した。令和三色は、ここまで残ったのだから食べられることはないだろうと言って、旅立っていった。鯉太郎も不安であったが、何とか残ることができた。

安心した鯉太郎であったが、頭頂部は薄くなる一方だった。どうしたら色を取り戻すことができるのか、教えてくれる鯉はいなかった。鯉太郎は赤いものを食べれば、少しは模様が濃くなるのではないかと考えた。しかし、毎日与えられるペレットは茶色である。ペレット以外に何かないかと探してみると、池に落ちてくる花びらや落ち葉があった。そんなものを食べても栄養にはならないと、ほかの鯉たちに笑われても、鯉太郎は赤い花びらや葉を貪り食った。ペレット以外のものなら何かよい効果をもたらすのではないかと思つて、池の底にいるヨコエビや稚ガ二も飲み込んだ。

そんな努力を重ねたものの、鯉太郎の模様は改善せず、悪化するばかりだった。鯉太郎もガラス板を見ないようにして、池の底でじっとしていることが多くなった。自分の将来について考えると気が滅入るので、鯉太郎は自分が赤美になったと勝手に妄想することにした。大きく成長した鯉太郎は輝く赤と白の対比が美しい紅白鯉になっていた。品評会に出品され、その美しさに審査員たちは感嘆の声を上げた。周りの鯉たちは、とてもかなわないと白旗を上げた。そして、全日本品評会で総合優勝を飾るのである。しばらくこの幻想に酔っていた鯉太郎であったが、突然、横を泳いできた鯉に「邪魔だ、どけ、薄頭」と怒鳴られると、現実に戻された。さほど見栄えのしない鯉にも馬鹿にされるのが、現実の自分だった。

やがて秋が深まったところに、最後の選抜が行われた。今回の選抜は残った鯉を三つのグレードに分けて、別々の池に収容するものだった。赤美など特に優れた鯉は、上級の池に収容された。その次の鯉は二級の池に、そして鯉太郎やその他の出来の悪い鯉は三級の池に分けられた。

飼い主が弟子に話していたことによると、上級の鯉には良い餌を与え、さらに大きく育てるらしい。二級の鯉にはこれまで通りの餌を与え、その中で色が変わってよくなったも

のは上級に移す予定だった。そして、鯉太郎たち三級の鯉は、これ以上良くなる見込みがないので、餌を減らして安く売ることになるらしい。どうやら鯉太郎たちは食べられることはなくなったが、エリートコースからは脱落したようだ。

鯉太郎は最後に赤美に別れを言った。

「私はいつかあなたと同じような立派な鯉になって、あなたと結ばれて子を作りたいと願っていましたが、それもかなわなくなりました。あなたは見事に選抜されたのですから、このち多くの人々を魅了して錦鯉の評判を高め、さらに大きくなって品評会で優秀賞をとってください」

赤美は鯉太郎の目をしっかりと見つめ、「これまで私のことを美しいと言ってくれ、名前をつけてくれてありがとう。あなたには私とちがった生き方があると思うけれど、必ず幸せになってください。私はあなたのことを忘れません」

鯉太郎が収容された池は形がいびつで、深さもなく、鳥除けのネットもところどころ破れていた。そして予想された通り、与えられる餌は少なくなった。

鯉太郎は隣で泳いでいた三色の鯉に訊いてみた。

「俺たちはこれからどうなるのだろうか？」

「それはわからないが、俺が聞いたところでは、この池の鯉は品評会で賞を取ったり、外国のバイヤーに高値で売られたりする見込みはなく、安値で買ってもらうらしい。ペットショップ、公園や旅館が多いけれども、池を新調した個人が見に来ることもある」

「いくらで売られるのかな？」

「上級の池の鯉は将来何十万円もの値が付くことがあるので、まだ売られないが、俺達には将来性がないからな。まあ、二級の鯉は一尾千円、俺たちは三百円くらいだと思うよ」

ここまで努力してきたのに、たった三百円かと思っただが、それでも観賞用に売られるならば、将来は広い池で悠々と過ごすことができるかもしれない。もう食われたり捨てられたりする心配はしなくてよいのかもしれない。

この頃になると、飼い主が鯉太郎たちの池を見に来ることはなくなった。餌は給餌器によつて与えられたが、その回数是一日一回になり、その量も減った。空腹に耐えかねた鯉たちは、落ち葉でも泥でも口に入れられるものは何でも食べるようになったが、どの鯉も痩せてきた。痩せすぎて病気になるって死ぬ鯉も目立つようになった。死んだり弱ったりした鯉を放置すると、ほかの鯉にも悪影響が及ぶので、それをすくって除去するために、毎朝、飼育員がやってきた。

このままでは自分も飢えて死ぬと思った鯉太郎であったが、ある日、数十尾の仲間が買  
い取られることになった。

「どの色の鯉がいいですか？」と飼育員に訊かれたバイヤーは、「適当に混ぜてくれたらいい」と答えた。

「あまり餌をやっていないので、ちょっと痩せているけどいいですか？」

「食欲が旺盛なほうが、釣り堀には向いているだろう。釣り客の餌によく食いつくはずだ」

「それにしても釣り堀に錦鯉とはぜいたくですね」

「黒いのの色が付いたのが混ざっていると、客は喜ぶんだよ。色がついていれば、模様はどうでもいいんだ」

飼育員に捕まらないように、網から必死に逃げた鯉太郎は、釣り堀に売られずにすんだ。釣り堀に行けば、何度も釣り針にかかって痛い思いをするか、それを恐れて飢え死にするか、どちらかだろう。できれば、もっとよい飼い主に買ってもらいたい。

一か月ののち、鯉太郎はとうとう売られて、老舗料亭の玄関に備えられた池で暮らすことになった。鯉太郎とともに売られたのは紅白が十尾、大正三色が五尾、それに黄金が五尾だった。池は浅く、最も深いところでも二十センチしかなかった。宿を訪れる客に見せるために、わざと浅くしているのだろう。

料亭とは言うものの、客はそれほど多くなかった。なにしろ古い料亭で百年以上前から開業しているらしいが、どこもかしこも老朽化していた。

受付に「鯉の餌代百円」と書いてあったので、お客さんが毎日のように餌をくれるのだと期待した鯉太郎であったが、期待外れだった。ランチタイムには、うどんや海鮮丼を六  
百円で提供していたが、よほどまずいらしく、訪れる客は稀だった。夜になると、二、三組の客がやってきたが、誰も鯉たちを見ようとしなかった。料亭のおかみや従業員が鯉に餌を与えてくれるのは、二日に一回程度だった。

なぜ客が少ないのか、鯉太郎は想像してみた。開業が古い由緒ある料亭であるにもかかわらず、建物は小さく、部屋も多くないように思われた。そのうえ、玄関の向こう側には、新しい回転寿司店と定食屋があり、客で溢れていた。

一方で、鯉太郎の料亭では従業員が少なかった。高齢のおかみのほかに、オウナーの御主人がいたが、ふだんはどこかに働きに行っていた。あとは午後になってやってくる料理

人が一人と、客が多いときにやってくる従業員が二人しかいなかったのも、人件費はかからない仕組みだ。ランチはおかみが作るから、まずいのだろう。これでやっていけるのかと思うけれども、料亭の前には海水浴場が広がっている。夏になると大勢の客がやってくるのかもしれない。その場合には、臨時の従業員を雇えばよいのだろう。

鯉太郎がこの料亭ではじめて餌をもらったのは、到着してから二日後だった。家族連れの客が来て、その帰り際に子供が鯉に餌をやりたいと言ってくれたのである。

「あらあら、それはありがとう。鯉ちゃんたちも喜ぶでしょう」とおかみが言ったので、鯉太郎も待ち構えていたのだが、それはほかの鯉たちも同じだった。鯉太郎達、新しく入った二十尾のほかに、以前から飼育されていた五十尾ほどの鯉がおり、彼らは餌をやるうとする子供の前で、口を開けるだけでなく、上半身を水上に突き上げるようにして、投入される餌を独り占めしようとした。鯉太郎も近くまで寄ったものの、その体を踏み台にしてほかの鯉が乗り上げたので、結局こぼれてきたペレットを三個口に入れただけだった。

「おもしろい！」と言って、はしゃぐ子供が餌を追加しないかと待っていたのだが「さあ、満足したでしょう。もう帰りましょう」という母親の一声で、子供もあきらめてしまった。

「おかみさん、鯉たちにもう少し餌をあげましょうか」と従業員が言ってくれたのだが、おかみさんは首を横に振った。

「餌をやりますと水質が悪くなって、病気が増えるのよ。痩せているほうが死なないから、これでいいの。たくさん鯉がひしめき合っているのが、お客さんに喜ばれる。一尾一尾の模様なんて誰も見ないから、とにかくカラフルで華やかな感じが出せたら嬉しいわ。うちの料亭は古くて見栄えがしないから、鯉で補うという発想ね。今度、二十尾の鯉を買ったけれども、全部でたったの五千円しかしなかったのよ。ほんとうは六千円だったけれど、たくさん買うからと言って千円まかせさせたのよ」

そう言って、おかみは「鯉の騎馬戦が見られますよ。餌をやってみてください」と書いた大きな紙を池の前に張り出した。

鯉太郎はがっかりした。俺たちは客寄せパンダなんだ。餌ももらえない。それに、ほかの鯉たちが鯉太郎とそれほど大きさがちがわないということは、鯉太郎もこれ以上大きく成長できないことを暗示する。八十センチにもなって、輝く紅白の模様を誇るといふ鯉太郎の夢は小さく縮んでいった。

これまでこの池で過ごしてきた先輩鯉たちは、今の状況を悲観しているようには見えなかった。鯉太郎はその中でひととき大きな黄金色の鯉に訊いてみた。

「餌がもらえないけれども、あなたは比較的大きくなっていますね。何か秘訣はあるのですか？」

「おまえは新参者だな。餌をめぐる競争は厳しいんだ。競争する相手に秘策を教えるわけにはいかない」

「そんなことを言わないでくださいよ。あなたは先輩でしょう。後輩には優しく接するべきではないでしょうか」

「それなら、おまえは俺の子分になるか？ 子分になって俺様の役に立つなら、少しは指導してやってもいい」

鯉太郎は少し考えてから、子分になることを決めた。新しい環境では先輩の言うことを聞き、少しでも多くの情報を教えてもらうことが必要だ。

「親分のことをなんて呼べばいいですか？」

「名前は特にないから親分でいい」

「私たちは今回新たに購入されてここにいます、それは死んだ鯉がいるからですか？ そうならば、その鯉たちはどうして死んだのですか？」

「いい質問だ。死ぬ鯉はいる。その原因は栄養不足になって痩せた結果、病気に感染してしまうからだ。体に白い綿や粒のようなものがついて、やがて死んでしまう。傷がついて、そこから病気になる鯉もいる。だから餌をもらおうとして、勢い余って壁に衝突することは避けなければいけない。傷ついた鯉から病気がうつることもある。それを防ぐために、おかみは痩せすぎたり、少しでも病気の兆候が出たりした鯉は取り除いてゴミ箱に捨てることがある。まあ、こういうと悲観的になってしまうが、ときどきお金持ちの子供が来て、鯉が欲しいとねだることもある。それでおかみが鯉を売のだが、行き先がお金持ちの立派な池なら、幸せに暮らすことができるかもしれない」

「そうですか、親分のアドバイスはありがたいです。これからもいろいろと教えてください。ところで、親分の役に立つためには、何をしたらいいですか？」

「あそこに真っ白な鯉がいるだろう。紅白だったのが、色が抜けてつるつばげになった奴だ。あいつとは敵対関係にあって、餌をもらうたびに邪魔をしあっているんだ。おまえはあいつが餌を食べられないようにブロックするんだ」

親分が見た先には大きな白い鯉がゆったりと泳いでいた。鯉太郎の二倍位くらいのおおきさがあり、体力でかないそうになかった。

「大きくて強そうな奴ですね」

「でかい口を大きく広げて餌を独り占めしようとするんだ。おまえがブロックしたときに、俺はたくさんのお餌を食べ、次には俺がブロックしておまえを助けてやる。それに俺にはほかに子分が二尾いるんだ」

子分として紹介されたのは、三色のうち赤色がほとんどなくなった鯉と、紅白なのだが赤色の模様がすべて薄くてオレンジ色に見える鯉だった。鯉太郎はどちらも先輩なので、よろしくお願いいたします、と丁寧に挨拶した。

餌をめぐって激しくジャンプしないと食べられない状況では、自分の力だけでは生きていかれないことは明らかだった。子分となって、親分や先輩の力に頼りながら、自分の技量を高めるのはよい選択だと思った。

鯉太郎がはじめて白鯉をブロックしようとしたときには、白鯉に逆に押さえつけられて、動けなくなってしまった。しかし、白鯉はそのことによって餌を独り占めすることができず、その間にほかの鯉が餌を食べることができた。親分は「はじめてにしてはよくやった」と褒めてくれた。

それから鯉太郎と先輩たちが交互にブロックし、自分が食べる番になったときには、親分の横でペレットにありつくことができた。しかし、親分は自分でブロック役に回ることはなく、いつも食べる側だった。

従業員たちは、鯉たちが人間の言葉を理解するとは思っておらず、おかみがないときには料亭の悪口を言い合っていた。冬になって、海水浴場を訪れる客はおらず、外国人を引き付ける魅力も乏しかった。従業員をしぼっているのです、お客へのサービスが行き届かないことも問題らしい。

「ここは料理も今一つよね」と古参と思われる従業員がつぶやいた。

「海の近くなのに、刺身が養殖ものばかりで新鮮ではない、と客に言われたわ」と言ったのは若い従業員だった。

「客の予約が少ないときは、おかみがすべてやるから、私たちは要らなくなるでしょう。そしたら、今日は来なくていいと言われるから、稼げないのよね。しかも、客はどんどん減っている」

「これからどうなるのでしょうか」若い従業員は不安げだった。

「おかみと社長は年金とこれまでの貯金で食っていけるでしょう。それで最後はここを売り飛ばせばいいと考えているのよ。だから、この料亭をもっと繁栄させて多くの客を呼ぶことは、まったく考えていないのね」

「私、どこか将来性のある職場で働きたいわ」

「それは考え方によるよ。客の少ない店では仕事も少ないから、楽に稼げるとも言えるのよ。呼んでもらわれないと働けないけれども、呼ばれたら楽に稼げるんだ」

「もう少し考えてみるわ」

この会話で料亭の現状はよくわかったが、自分たち錦鯉がこれからどうなるのかはわからなかった。

その後、鯉太郎は親分の指示のもとに、何とかペレットにありつけるようになったが、先輩たちに比べれば、まだまだテクニクは未熟だった。それで三色くずれの先輩の動きを観察すると、いくつかのことがわかってきた。

まず、白鯉をブロックするときに、白鯉が怒って攻撃してくることがある。このときに、先輩たちはすぐに逃げて攻撃をかわし、同時に上から降ってくるペレットにも目を配って、少しでも餌にありつこうとする。ブロックしない場合、ほかの鯉よりもよい位置を占めて、さらにジャンプしながらペレットを口に入れるのだが、このときに先輩たちは弱そうな鯉を見つけ、その背後からジャンプして、弱い鯉を踏み台に利用する。弱い鯉とは、多くの場合小さな鯉であり、鯉太郎たち新たに加わった鯉のことである。さらに重要なことは、餌をくれる人の動きであり、まだペレットを持っているか、それとも手持ちのペレットをすべて投入したかを、瞬時に見極めることが必要である。まだ持っていれば、次の投入を待ち、終わっているならば、今度は池底にこぼれたペレットをすくって食べるのである。一粒でも多くのペレットを食べることが、明日の活力になり、少しでも太ったり成長したりする原動力になる。

玄関の先では雪が積もっていた。外の池で飼われている鯉は、活動を休止させ、餌も食べない時期である。しかし、鯉太郎の池は室内にあり、隣の温泉から湯が入っていた。温泉の水が井戸水と混ぜられて、鯉太郎の池に供給されていたのである。「かけ流し」のために、池の水は清潔に保たれていたが、水温が高いから鯉たちは一年中餌を食べなければならぬ。

冬に料亭を利用する客は一層減ったが、正月だけは満室になった。正月休みを利用して美味しいものを食べようとする客が多いせいである。帰省客が多いこともあって、ランチも盛況で、鯉太郎たちは一日に何度も餌をもらうことができた。

ロビーで客たちの相手をするおかみは上機嫌だった。

「正月ににぎやかなのは嬉しいわね。毎日、このくらいのお客さんが来てくれたら嬉しい

のだけれど……」

それを聞いた客は、毎年やってくるらしい。

「今年は鯉の数が増えたねえ。たくさんの色鯉が泳いでいるのは縁起がいいね」

「こないだ新しい鯉を入れたんだけど、どうかしら」

「ずいぶん高かったのではないかい？」

「いやいや、模様の出来の悪い三流鯉ばかりだから安いものよ。それに、ここだけの話だけれど、ときどき売ってほしいという客がいるから、一尾二千円で売ってあげるのよ」

「もとはいくらで買ったんだい？」

「それは秘密。こっちも商売でやっているんだから、教えてあげないわよ」

三流鯉と言われて、鯉太郎はおもしろくなかったが、この頃は自分の姿を見ていないので、一流だと言い張ることはできなかった。実際、まわりの鯉を見ても、赤美のような魅力的な鯉はいなかった。外見だけではなく、料亭の池では、餌をめぐって争ってばかりいるので、どの鯉も品格に乏しかった。自分はこんなところで、ペレットを少しでも多く食べようと奔走する生活を送り続けるのだろうか。

いや、待てよ。おかみが鯉を売るというのだから、環境が良く多くの餌を与えてくれる新しい飼い主にめぐりあうことも夢ではない。そのためには、買ってくれる客を見定め、ふだんからアピールすることが重要だ。

それから鯉太郎は、料亭にやってくる常連客を観察し、覚えることにした。彼らの会話に耳を立て、買ってくれる可能性を探した。彼らの会話の中で、一戸建ての家を持っていない客や貧乏な客は、脈がないと判断した。子供のいる家族と独り暮らしの高齢者のどちらに脈があるのかは、よくわからなかった。

餌を買ってくれなくても、池の端にやってきて鯉たちを眺める客は多かった。出来の悪い鯉でも、多数集まれば華やかに見えるものだ。鯉たちも、客が餌をくれるように、池中をぐるぐると泳ぎまわったり、口を水面につけてぱくぱくさせたりしていた。そんな場合でも、鯉太郎は品格を保ち、わざと客の近くをゆったりと泳ぎながら、ほかの浅ましい鯉とはちがうことをアピールした。客が去ってしまうと、すべての鯉は動きを止め、池の底にへばりついた。消費するエネルギーを最小にするためである。

正月が過ぎて寒さが一層きびしくなると、料亭の客もほとんど来なくなった。家の外に出るのもおっくうになるから、食事に出る気にならないのだろう。おかみは一日中暇を持って余し、ロビーでただらしていることが多かった。たまに客が来て「鯉に餌でもやった

らどうだ」と言われても、「冬だから餌を食べないんだよ」と言ってとりあわなかった。

ところがある日、ランチを食べにきた家族が、鯉を買いたいと言いだした。初めての客だったので、鯉太郎もマークしていない客だった。

「どの鯉がいいですか？」とおかみが訊くと、しばらく選んでいた子供が「あの白くて大きい」と言って、白鯉を指さした。

「ほかにどれを買いますか？」とおかみが言ったので、鯉太郎はびっくりした。もし、白鯉と鯉太郎が水槽で二尾だけになったら、いじめられて殺されてしまうだろう。絶対に自分を選ばぬように、鯉太郎は池の底で、他の鯉の陰に隠れるようにした。

結局、その客はほかの鯉を買わずに、白鯉一尾だけを持って帰った。その理由は水槽が小さいから、今回は一尾だけにしておくということだった。

白鯉がいなくなつて、池では親分が絶対的権力者となつた。餌をもらうときに、親分の周りに近づくことは許されなかった。それでも鯉太郎たち子分は、親分から少し離れたところで餌を獲得することができたが、親分に嫌われていた鯉たちは、餌の投入場所から離れたところで、まったく食べられないか、わずかのおこぼれにあずかることしかできなかった。

そんなある日、ロビーで酔った客がおかみと口論を始めた。

「この飯はまずい。海の近くの魚が新鮮でない。それに養殖魚ばかりでないか。今日のエビはどこで獲れたんだ。言ってみろ」

「まあまあ、お客さん。養殖した魚のほうが、海の資源を減らさないで、地球にやさしいんですよ。海の魚は汚染しているかもしれないけれど、養殖魚なら安心して食べることができるでしょう。それにブリやカンパチなんか、養殖物の方が脂の乗りがよくて美味しいんですよ」

「おれはそんな理屈は認めないな。それで、このエビはどうなんだ。ボタンエビでも車エビでもないだろう」

「これは赤エビという種類ですよ」

「赤エビ？ どこで獲れたんだ？」

「えーと、確かアルゼンチンですよ」

「なんでアルゼンチンのエビをここで出すんだ！」

「私も食べてみたけれども、ボタンエビと味は変わりませんよ。そうそう、今日お出ししたウナギは天然物ですよ」

「ここで天然ウナギが獲れるのか？ 聞いたことがないぞ」

「ここで獲れたとは言っていないではないですか。獲れたのはアメリカです」

「ふぎけるな。そうだ、そんなものを食わずなら、この池の鯉でも出したらどうなんだ。こっちのほうの方がうまいかもしれない」

鯉太郎やそのほかの鯉たちは、おもしろい展開になったと思った。鯉を食うとなれば、大きくて太った親分を選ぶのではないかと思ったからである。親分がいなくなれば、鯉太郎達は平穩に暮らすことができるかもしれない。

「いいですよ、でも一匹二千円ですよ、それに調味料として千円いただきます」

おかみの言ったことに客はあきれて、「こんな小さな鯉に三千円も払えるかよ」と吐き捨てて帰っていった。

春が来ると、ほうぼうで桜が咲き、お花見のついでに料亭に来る客が増えてきた。冬の間、海が荒れて出漁できなかった漁船が、新鮮な海の幸を獲ってくるようになった。冬の間、養殖魚ばかり出していた料亭も、大量に獲れて安くなった天然魚を使うようになった。

「この頃、飯が美味くなつたな」と話し合う常連客の声に、鯉太郎の期待は高まった。

餌を与えてくれるのも、鯉を買ってくれるのも、お客さんだ。お客さんが増えるということは、鯉太郎にとって、この池から脱出する確率が増すということだ。一方で、水温が上がることによって、病原菌の活性も高くなっていった。栄養状態が悪いところに、感染症の危険が高まってきたので、おかみはしばしば池を覗いては、弱った鯉を網ですくって取り除いた。

「取り除かれた鯉はどうなるのでしょうか？」と鯉太郎は親分に訊いてみた。

「放っておくと他の鯉にうつるからな。さっさとゴミ箱に放るのだろう」

「まだ生きているのに、可哀そうではないですか。私が生まれた池では、薬の入った容器に収容して、病気を治していましたよ」

「それは将来何万円にもなる鯉の話だろう。ここの鯉は安物だから、薬のほうが高くつくというものだ」

「それなら川に逃がしてやれば、回復するかもしれません」

「川まで行くのに、ここから十分もかかるんだ。面倒くさいだろう」

親分の言うことはもつともだと思つたが、弱つたからと言ってゴミ箱に放るのは、動物の幸せを無視した行為ではなからうか。ここまでがんばってきたのに、ゴミ箱で死ぬのは

絶対に嫌だと、鯉太郎は思った。

そんなある日、常連客が釣りに行った帰りに、旅館にやってきた。

「おかみさん、川の魚を釣ってきたけれど、いらんかい？」

「おやまあ、何が釣れたんだい？」

「ハヤとオイカワだ」

「唐揚げにしたら、おもしろいかもしれないわね。魚にくわしい客に訊いてみるから、とりあえずその池にいられておいて」

五尾のハヤと十尾のオイカワが、池に放された。彼らは池の中を激しく泳ぎ回って、しばしば鯉に体当たりした。

「こんなに狭い池でスピードを出しすぎだ。静かにせんかい！」と親分が注意すると、オイカワが「俺たちはどうせ食われるんだ。だから泳ぎ回って気を紛らわせているんだ」と答えた。

「食われると決まっているわけではないだろう。ここで観賞用に飼育されることもあるかもしれない」と鯉太郎が言うと、「黒くて小さな俺たちみたいな魚が、観賞に耐えられるはずがないだろう。もう食われるのは時間の問題だ」とハヤが言った。

そのとき、おかみが池に近づいて、「川魚は泥を食っているから、少しきれいな水で飼育して、臭みを消さないと食べられないらしい」と言った。

「でも、川魚なんて好む客がいるだろうか。アユやイwanaならともかく、ハヤやオイカワだろう。それだったら、養殖の海産魚のほうがましだと思うよ」

そう言ったのは、川魚を持ってきたのはちがう常連客だった。川魚の好みは人によつてちがうものだと気づいた鯉太郎は、錦鯉に対する好みも人によつて異なるのではないかと気が付いた。頭が薄くなった鯉太郎に魅力を感じる奇特な人も、きっとどこかにいるはずだ。

やがてぐるぐると池を回ることをやめたハヤが鯉太郎に近づいてきた。

「おかみの話だと、今すぐに食われることはないようだな。だから落ち着いて、今後のことを考えることにする」

「今後のことって、何をするつもり？」と鯉太郎は訊いてみた。

「この池の水は排水路に流れるのだろう。その排水路はどこにつながっているのかな？」

「俺はこの池にきて間もないから、排水路のことはよくわからない。親分に訊いてみよう」

鯉太郎が親分に訊いたところ、排水路は少し下ってから、海に注いでいるらしい。鯉は

海では生きられないから、排水路に逃げ出すのは得策ではないとのことだった。

ところが、それを聞いたハヤは目を輝かせて「海につながっているのか。それなら俺たちは自由になることができるかもしれない」と言った。ハヤは川でも海でも生きていくことができるから、排水路へ跳んで逃げる機会をうかがうらしい。

ところが、この会話を聞いていたオイカワは、「俺たちは海では生きられない。海へ逃げるわけにはいかない」と言って落ち込んだ。

そこで鯉太郎は、「君たちはどうして捕まえられてしまったんだ？」と訊いてみた。

それを聞いたハヤは思い出さたくないといった表情で遠去かっていった。

オイカワはもう泳ぎ回る気力を失っていた。「おいしそうな餌に食いついてしまったのさ。まったく俺はバカ者だ」と言って、オイカワは胸びれを広げて、池の底にへばりついた。

その日の夕方、ハヤたちは勢いよく排水口をジャンプして、池から脱出した。その様子を鯉太郎たち錦鯉とオイカワはうらめしそうに眺めていた。

ウグイがいなくなったことに気が付いたおかみは、排水口の金網を高くしたが、鯉太郎もオイカワも逃げ出す気力は持ち合わせていなかった。

「やっばり、俺もいっしょに逃げればよかったかもしれない」

オイカワはまだよくよとしていた。

「食べられるのも地獄、海で死ぬのも地獄なら、海で思いっきり泳ぎ回って死んだほうが幸せかもしれない」

「ここにいて食べられると決まっているわけではないだろう。だいたい、君みたいに小さな魚を食って美味しいのだろうか」

オイカワに対して失礼なことを言ったので怒るかと思ったが、オイカワは苦笑いをするばかりだった。

翌日から、おかみは自分でペレットを与えるようになった。魚が空腹であることに気が付いたのか、オイカワを太らせてから食おうとしたのかは、わからなかった。

その日は突然やってきた。客の一人が孫のために鯉を買いたいと言い出し、鯉太郎を指名したのである。

「なんでこんなパツとしない鯉がいいんですか？」とおかみが訊くと、その客は「あはは、頭が薄くて俺に似ているだろう。これを贈って、孫にわしを思い出してほしいんじや。こ

の鯉はまだ若いだろう。俺が死んだ後でも、何年も生きるはずじゃ」

鯉太郎が池を去るとき、親分は悔しそうな表情をした。子分たちは「どうせすぐに死ぬだろう。俺たちはここで何十年も生きてやる」と強がりと言った。オイカワは池を出る鯉太郎を見ようとしなかった。

鯉太郎の新しい飼い主は、正平という名前の男の子だった。住宅地の子供部屋に置かれた水槽は六十センチほどの長さしかなく、エアープンプによって酸素が供給されていたが、水を浄化するフィルター装置はなかった。

鯉太郎を収容したのち、おじいちゃんと正平は鯉太郎の泳ぐ様を食い入るように眺めていた。

「錦鯉を真横から観察するのも綺麗なもんじゃな。赤の模様だけでなく、白地の部分も輝いて美しい」

真横から観察すると、鯉太郎の頭の模様が薄いことは気づかれにくく、側面の赤や白が際立って見える。そのことに気がついた鯉太郎は嬉しくなった。

「でも、ちょっと痩せているね。ぼくが餌をたくさんあげて、太らせてやる」

「この鯉はわしだと思ってかわいがってくれ」

「うん、そうだ、この鯉に名前をつけてあげよう」

「それならわしと同じ次郎にしてくれんかの」

「いいよ、次郎にしよう」

それを聞いた鯉太郎は、どうせなら太郎にしてくれればいいのに、と思ったが、祖父の名前ということなら仕方がない。それよりも、早く餌をくれないだろうか。鯉太郎はしきりに水槽の底をつつく真似をした。

翌日、正平は鯉用のペレットを買ってきた。鯉太郎は食べるようにペレットを食べたが、満腹になったのは久しぶりのことだった。正平は鯉太郎が餌を食べるのが嬉しいらしく、次から次へとペレットを投入するので、とうとう食べ残したペレットが腐りだした。浄化装置がないので、水質はみるみるうちに悪化し、水も濁ってきた。

正平も次郎もないときに、正平の母親が部屋に入ってきて、ため息をついた。「臭いわね、まったくいい迷惑だわ」とつぶやいた母親は、鯉太郎を見ても眉をひそめるばかりだった。

水質の悪化に気が付いた祖父は、ペットショップでフィルター装置を買ってきた。おかげで水質は回復し、さらに水槽の底に砂利をひいてくれたので、水槽はきれいに見えるよ

うになった。

ところが、正平が「鯉が一尾だけだと寂しんじゃないかな」と祖父に言ったので、鯉太郎は悪い展開を想像して、身震いした。もし、親分やそのほかの大きな鯉が同じ水槽に入ってきたら、鯉太郎は肩身の狭い思いをしなければならぬ。下手をすると、つつき殺されてしまうかもしれない。鯉太郎は自分だけでも十分に楽しいことを知らせたかったが、人間は鯉の言葉を理解することはできない。そこで、鯉太郎は水槽をゆったりと泳ぎ、ときどき欠伸をして、この環境に十分満足していることを伝えようとしたが、正平には伝わらなかった。

「おじいちゃん、今度は何色の鯉がいいと思う？」

そうじゃなあ、でも水槽が小さいから、もっと小さい魚のほうがいいかしらん」

「小さい魚？」

「フナやオイカワはどうじゃ？ それなら近くの川で釣ってきてやるぞ。金もかからん」

「黒い魚は嫌だな。きれいな色の魚がいい」

「それなら金魚じゃな。金魚を買ってやろう」

鯉太郎ではなく、金魚が購入されると聞いて、鯉太郎は安心した。金魚ならば小さいから、自分がいじめられることはないだろう。

翌日、正平と次郎はペットショップで赤色の和金を五尾買ってきた。

水槽に放流された金魚は、はじめは鯉太郎を見て警戒していたが、やがて仲間の多い自分たちのほうが優勢であることに気が付いた。おまけに、しばらく金魚を見ていた正平が、「金魚のほうが赤色が濃くてきれいだ」と言ったものだから、鯉太郎は自分が出来損ないの錦鯉であることを再認識し、気後れするようになった。

やがて正平がペレットを投入した。水槽に入れられた直後であるから、金魚は餌を食べないだろうと鯉太郎は思ったが、金魚たちは一斉にペレットに突入し、落ちてきた餌を食べつくした。鯉太郎はひとかけらも食べることができなかった。金魚たちはペットショップで、旅館にいた鯉太郎と似た状況に置かれていたのだ。彼らの素早い動きは、鯉太郎には脅威になった。

「おまえたちは腹が減っているのかもしれないが、狭い水槽で醜い争いは止めないか。ここでは餌はいくらでももらえるのだから、ががつすることはない」

それに対して、金魚の中で一番大きな奴が、「うるせーな、餌は食えるときに食っておくものだ。前から棲んでいるからといって、でかい顔をするな。俺たちのほうが数は多いか

ら、いざというときは、おまえをブロックして餌を食えなくさせることもできるんだ」と言った。

ブロックするというのは、旅館の池で鯉太郎たちが白い鯉に対してとった戦術だった。金魚は一見するとかわいいが、考えていることは汚いと思った。

鯉太郎は金魚たちに対して自分が有利な点は何か考えてみた。第一に思いついたのは、一尾一尾を比べてみると、鯉太郎はどの金魚よりも大きいということだった。大きいということは重いということだ。試しに鯉太郎は、一番小さな金魚の上に覆いかぶさって、体重をかけてみた。驚いた金魚は必死に尾びれを振って、鯉太郎から逃れようとした。鯉太郎は勝ったと思ったが、金魚たちは集まって、どう対応するか相談しているようだった。やがて金魚たちは、いつでも群れをなして泳ぐようになり、鯉太郎が下手に手を出すと、かえって逆襲されそうだった。

次に鯉太郎が考えたのは、成長のちがいだった。鯉は何十年も生きて、一メートル近く成長することができる。それに対して、金魚は成長が遅く、十年以上生きることは珍しい。大きくなっても、せいぜい二十センチくらいだろう。このまま水槽で順調に餌を食べていれば、体格のちがいはますます大きくなるにちがいない。

次に餌が与えられたとき、鯉太郎は金魚の群れに突入して、自分も餌を口に入れようと奮闘した。しかし、小回りがきく金魚は、一粒一粒のペレットを確実に食べたのに対して、鯉太郎は空振りすることが多かった。近くにいる金魚を押しつけて妨害すると、その際にほかの金魚に餌をとられてしまう。

結局、鯉太郎にとって最善の方法は、金魚の下にこぼれて底にたまったペレットを、砂利ごと吸い取って、その中に含まれる餌だけを食えることだった。この方法だと、口の大 きな鯉太郎は有利である。正平がペレットを少しずつ与えると、鯉太郎の戦術は不利になるが、実際には正平はある程度まとめてペレットを放り入れたので、鯉太郎は十分な餌を確保することができた。

水槽の様子を見ていた正平は、金魚がいつも群れて、鯉太郎から離れたところにいることに気が付いた。

「おじいちゃん、あいつは金魚をいじめているんじゃないかな。金魚が怖がっているよ」「弱い動物は集まって、助け合うらしい。鯉はいないほうがいいかもしれない。でもな、この鯉はわしの分身なんじゃ。頭がうすいところがよく似ているじゃろう。だから、かわいがってくれないかな」

「あまり、かわいくない」

「わしは、この鯉が料亭におるときから、よく観察していたんじゃ。旅館で餌をめぐって鯉どうしが争っていたとき、次郎は大きな鯉にいじめられていたんじゃ。その健気な様子が気に入って購入することにしたのだから、こいつをこの家で食べたり、猫の餌にしたりすることは避けてくれ」

猫の餌、と聞いて、鯉太郎は身震いした。せっかく安住の場所に落ち着いたと思ったら、飼い主の正平に嫌われかけている。鯉太郎は金魚と仲良く過ごしていることを知らせようと、金魚の群れに近づいてみるが、そのたびに金魚は遠ざかってしまい、かえって敵対しているように見えてしまった。

そこで、鯉太郎は金魚の群れを注意深く観察した。同じ種の個体でも、誰もが仲が良いわけではないことは、鯉太郎も十分承知していた。ボス金魚にいじめられていたり、仲が悪かったりする金魚はいないだろうか。

そういう目線で金魚の群れを見ると、一番小さな金魚が怯えているように思われた。初めは鯉太郎を恐れているのかと思ったが、そいつはいつもボス金魚から離れたところを泳ぎ、ボス金魚と会話することもなかった。他の金魚の赤色が目立っていたのに対して、ちび金魚は全身が白っぽく、赤い部分は尾の近くだけで、しかもその色は薄かった。餌を与えられたとき、ボス金魚はもつとも多くの餌が落ちてくる場所を確保したが、ちび金魚は少し離れたところで、こぼれてくるペレットを食べていた。

鯉太郎はボス金魚が見ていないときに、ちび金魚に話しかけてみた。

「君はいつもボスを恐れているように見えるが、実際はどうなんだ」

「それは怖いです。金魚の中では、ボスだけが強くて、残りの連中はおまけのようなものです」

「それでは君はぼくを恐れているのではなく、ボスにいじめられないようにしているんだな？」

「そうです。あなたは大きいだけで、とくに強いわけでもなく、いじわるでもありません。

いつも、底に落ちた餌を拾っているだけなので、私にとっては脅威ではありません」

「俺だってほんとうは強いのだが、金魚なんか相手にしないのだ。とくに弱いものを虐げるようなことは絶対にしない」

「そうですか。それでは私を守ってくれますか。私がボスにいじめられそうになったら、助けてくれますか？」

「わかった。もしおまえが餌を食べられなくなったら、俺が吸い上げた餌を分けてやる」  
それから、ちび金魚はいつも鯉太郎のうしろを泳ぐようになった。ボス金魚がちびを攻撃しようと近づくと、鯉太郎はその動きをブロックして、ちび金魚を守ってやった。

正平はちび金魚が鯉太郎と泳いでいるのを見て、「鯉と金魚が仲良くしている」と言っているんだ。鯉太郎もこの水槽で初めて仲間ができて、単独で暮らしていた頃に比べて、毎日が楽しくなった。

しかし、正平が学校に行っている間、この家に魚の味方はいなかった。祖父は正平が家にいないときには、やってこない。祖父と祖母は、少し離れた家に住んでいるからだ。正平の父は会社員で、平日には夜遅くにならないと帰ってこない。正平の兄弟姉妹はいない。結局、家にいるのは母親だけであり、彼女は水槽を見るなり、「邪魔ねえ」、「なんだか臭い」、「安っぽい魚ばかりだわ」などと呟くのを、鯉太郎は聞き逃さなかった。

なんとか母親に気に入られようと、鯉太郎は口をぱくぱくさせたり、水面近くを速く泳いでみたり、いろいろ試していたが、無駄だった。母親は『川魚の料理法』というタイトルの本を買ってきて、ぶつぶつ呟いていた。

「唐揚げにして、甘酢のあんをかけたら、色鯉でもおいしいかもしれないわね。でも、金魚は食べようがないわね。甘露煮にしてもまずそうね」

鯉太郎はいつ食べられるかわからない恐怖の中で、毎日餌を食べることと、ちび金魚を守ることに精力を傾けた。その結果、鯉太郎は急速に成長し、その体長は三十センチ近くになり、水槽の中で向きを変えることもむずかしくなっていた。

鯉太郎が窮屈な日々を送っていることには、正平も母親も気付いていた。

「かわいそうだから、大きな池を造ってほしい」と訴える正平に対して、母親は「せっかく大きくなったのだから、みんなで食べましょう」と突き放した。頼りの祖父は体調が悪いらしく、この頃やってこない。

家族会議の結果、正平の父は正平と母親のどちらかに加担することを避けて、第三の案、すなわち鯉太郎を川へ逃がすという提案をして、結局これが採用されることになった。あとなんて祖父が反対したが、「それならおじいちゃんが池を造ってくれるのですか？」と母親に言われて黙ってしまった。それでも、祖父は鯉にとって餌が豊富な、過ごしやすい川を見つけてくれた。

鯉太郎はちび金魚もいっしょに逃がしてくれないかと願ったが、魚の言葉は人間には通じない。ちびがこれからボスにいじめられないか気になったが、自分やちび金魚の運命を

変える力は、今の鯉太郎にはなかった。

鯉太郎が放流されたのは、正平の家から車で三十分ほど走ったところにある川だった。もっと近くにも小さい川はあったが、できるだけ過ごしやすい大きな川を選んでくれたのだ。田んぼに囲まれているためか、水は茶色に濁っていた。その水色に鯉太郎は安堵した。いくら価値のない鯉といっても、鯉太郎は錦鯉である。川で泳いでいけば、他の魚よりも目立つことになり、カワウやアオサギなど、魚を捕らえて食べる鳥に見つかりやすい。濁った川は暮らしにくいと思うのは人間の勝手であり、鯉にとってはこのくらいの濁りはちようどよいと思った。

鯉太郎を放流してから、正平は泣いて別れを惜しむと思っていたが、実際には放流するとすぐに家に戻っていった。このち正平がこの川にやってくることはなかった。

川にはフナ、オイカワ、ハヤ、ドジョウなど、さまざまな魚がいた。他の魚がいるということは、環境がよいということだ。驚いたことに、かつて旅館で短い時間過ごしたハヤと、この川で再会した。

「どうして、君はここにいるのか？」と訊くと、「旅館の池から逃げ出して一度海に出たんだ。それから少し移動して、河口からこの川に遡上したというわけさ」とハヤは答えた。

次に、鯉太郎がどうしてこの川にいるのかを説明したところ、ハヤは驚いたものの、鯉太郎の無事を喜んでくれた。

生まれて初めて、鯉太郎は囲われていない広々とした空間で生きることになったのだが、川の構造や特性がよくわからなかった。そこでハヤに注意するべき点を訊いてみた。

「そうだな、水の透明度がよいときには、空から襲ってくる鳥に気をつけるべきだ。君は僕よりも大きいけれども、サギやカワウに襲われたら簡単に飲み込まれてしまうだろう。だから、危険なときに隠れる場所を覚えておくべきだ。それから注意するべきなのは、人間だ。網を打ったり、釣りをしたりして、魚を捕まえようとする。僕は一度捕まってしまったので、とくに警戒を怠らない」

「警戒するって、どうすればいいんだ？」

「投網については、水面を叩きつける音がするから、すぐに遠くに逃げるんだ。釣りについては、あまりおいしそうな食べ物には口にしないことだ。小さな羽虫や泥の中の虫を食べれば大丈夫だ。君は錦鯉だから、とくに狙われやすいかもしれない」

ハヤのアドバイスを聞いてから、鯉太郎は身を隠す場所を探してみた。水草の間や倒木

の下は安心できる場所だった。投網を打たれても、捕まらないだろう。一方で、これまで人間によってペレットをもらっていたので、自然の川で何を食べてよいのかわからなかった。

ハヤやオイカワは何でも食べていた。流れてくる水生昆虫、水面に落ちてくる羽虫、泥の中のユスリカ、藻や苔を食べる雑食性だった。鯉太郎は植物を餌だと思えなかったが、泥ごと吸い込んで、味のするものはすべて飲み込んだ。ハヤやオイカワに比べて有利なのは、タニシやカワニナのような、比較的大きな貝を飲み込み、咽頭にある歯でくだいて食べられることだった。そのほうが小さな虫を一つずつ食うよりも、効率が良いように思われた。

川の中をあちこち動いていると気持ちが悪かった。どこまで泳いで行っても、川は続いていた。しかし、上流へ向かって遡ると、やがて川は狭くなり、水は冷たくなった。水深が浅く、流れが急になっていくとともに、水の透明度も高くなったので、ちよつと危険かもしれないと感じて引き返した。

下流へ行くと、ハヤが言った通り、川は海に注いでいた。また、下流部では鯉太郎よりも大きな魚が口を開けて襲ってきた。ハヤに訊くとオオクチバスという外来魚らしい。バスに食われないためには、もつと大きくならないといけない。ただし、水が濁っていれば、バスに襲われる危険はほとんどないらしい。そう思って安心していたら、今度は別の魚に襲われた。顎にヒゲがあるナマズという魚だった。ナマズは夜に寝込みを襲ってくると聞いていたが、昼間でも活動することがあるらしい。

一方、錦鯉にはまったく出会わなかった。見かけるのは黒い鯉ばかりで、その体長はいずれも五十センチ以上あり、中には八十センチもの大物もいた。鯉太郎がこれほど大きな鯉を見るのは初めてだった。黒鯉たちにとっては、鯉太郎は色が付いたチビ鯉にすぎず、出くわしても鯉太郎を仲間だとみなしているようには思われなかった。

鯉太郎はなんだか落ち着かなかった。今まで飼育されていた環境では、行動は制約されていたものの、危険は大きくなかった。飼い主はいずれも錦鯉に餌を与え、育てようとしてくれた。しかし、ここでは誰も餌をくれず、鯉太郎を捕食しようとする敵が何種類もいた。

鳥の気配を感じたら深場の隠れ家へ逃げ、ヒトが釣りに来たら餌に食いつかないようにし、オオクチバスやナマズのおいを感じたら、ひたすら遠ざかるようにした。黒鯉に食べられることはないだろうが、体当たりを食らったら痛い思いをするので、やはり避ける

ことにした。

結局、鯉太郎はハヤやオイカワと行動をとにもするようになった。群れているほうが、敵が近づいたときに早く気が付くことができる。襲われても、他の魚が食われることによって、鯉太郎が逃げられる確率は増加するはずである。

鯉太郎が他の魚を襲うことはなかったが、その卵は食物になった。鯉やフナ、ドジョウなどの卵は、泥や草の間に無造作に散らばっていたので、鯉太郎は草や泥ごと吸い取って、美味しい卵だけを消化した。卵は栄養に富んでいるようで、卵を食ったあとは元気が湧いてきた。

鯉太郎はしだいに、毎日の生活が刺激的で変化に富んでいることに、喜びを感じるようになっていた。それは、錦鯉の育成池でも、料亭の池でも、正平の水槽でも、感じたことがないものだった。狭い池や水槽では、与えられる餌を食べるだけの生活であり、変化があるとすれば、餌をもらえずに飢えたり、他の鯉や金魚と競争したりするくらいだった。

翌年の春、鯉太郎は二歳になり、オスとして成熟した。ほんとうは赤美のような錦鯉の卵を受精させたかったが、ほかに錦鯉はいなかった。そのために鯉太郎は黒鯉の群れに混ざって、産卵するメスのあとを追いかけた。小さな鯉だからといって、大きな黒鯉に攻撃される恐れはなかった。大きな鯉たちも受精させることに夢中であり、鯉太郎をかまう暇はなかったからである。

メスの鯉は川の本流から支流や水路に遡り、水草が密になっていたり、陸上植物が冠水していたりするところへ突っ込んでいった。そこで放出される卵は、植物に付着することによって、他の動物に捕食されにくくなる。鯉太郎のようなチビ鯉は、放出する精子は少なくとも、草の間に潜り込む点では有利であり、何回か受精に成功したと思われる瞬間があった。

もう一つ、嬉しいことがあった。登下校時に橋を渡る小学生たちが、しばしば川を見下ろして「魚がおる」と叫ぶことがあった。あるとき鯉太郎は、上空にタカがいないことを確かめてから、水面近くを泳いで見せた。子供たちは色のついた鯉があらわれたことに歓声を上げ、「赤い鯉がおる！」と言って喜んだ。正確に言えば、紅白の鯉だけれども、子供にそんなことを言ってもはじまらない。鯉太郎は子供が橋を通る時間になると、そのあたりで待つようになった。

「買ったら十万円するかもしれないぞ」

「いや、百万円だ」などと子供が言うのを聞いて、駄鯉として三百円で売られた頃の記憶

が蘇ってきた。しかし、ここでは子供たちは自分を高く評価してくれる。

そこへ子供のお母さんが迎えに来た。子供は鯉太郎を指さして、「ほら、あそこにきれいな鯉がいるよ。百万円するかもしれないって。捕まえて家で飼ってくれない?」と言った。

「こんなに広い川で捕まえるのはむずかしいわね。それに自然の川で自由に泳いでいるから、鯉も輝いて見えるのよ。狭い池で飼ったら、かえって可哀そうだわ」

お母さんの言葉を聞いて、鯉太郎はほっとした。こうして川で自由に泳ぎ、大きなタニシを見つけて食べたり、繁殖期にメスを追いかけて受精させたり、子供たちに喜ばれる日々は、まさに天国だった。

それから二年たったとき、鯉太郎にとって悲しいことが起こった。

悲しかったのは、ハヤの友人が弱って死んでしまったことである。ハヤに言わせると、寿命が来たので死んでしまうけれども、さまざまな経験をして、一度はヒトに捕まったけれども逃げることに成功し、こうして天寿をまっとうしたことに満足しているとのことだった。

嬉しかったのは、鯉の幼魚の中に、黒地なのだけれども赤い斑点がいくつもある鯉を見つけたことである。この川で赤色をもつ鯉は、鯉太郎だけだった。だから、赤い斑点のある幼鯉は鯉太郎の子にちがいない。

鯉太郎はその幼鯉に近づいて声をかけてみた。

「君はまったく黒い鯉ではなくて、赤い斑点をもっているね」

鯉太郎に声をかけられて、一瞬びっくりした赤い斑点の鯉は、鯉太郎が紅白鯉であることを確認すると、

「赤い斑点があるために、真っ黒の鯉たちに、色鯉、色鯉といっってはやし立てられ、いじめられるんです。あなたは紅白の鯉だから、私の気持ちをわかってくれるでしょうか」

「私も黒い鯉たちには嫌われているけれども、気にせずに生きている。繁殖のときには、黒い鯉のメスに近づいて受精させるように頑張ったんだ」

「それでは、あなたは私のお父さんですか?」

「ほかに赤色をもつ鯉はいないから、間違いないと思う。これからは私が守ってあげるから、黒い鯉を気にすることはない」

「あなたは紅白で美しいですが、私は黒い地肌赤い斑点がぶつぶつと浮き出ているばかりで、汚らしい鯉です。こんな私でも生きていけるでしょうか?」

「斑紋や色の美しさは、人間が勝手にきめたものだ。そんなものは、ここではどうでもよ

い。それよりも、天敵や人間に捕まらずに、生き延びて成長することが必要だ。十分に大きくなれば、捕食者に襲われる危険は減少する」

それから鯉太郎は、自分の子とともに行動するようになり、子を守らなければならないという使命ができたことよって、生きる張り合いが増したように思われた。そして、自分が必死になって繁殖活動に参加したことが、子孫の誕生というかたちで結実したことに喜びが込み上げてきた。この子が雄か雌かはまだわからなかったが、鯉太郎は「赤美」という名前を付けた。

鯉太郎は赤美に、この川で遭遇する天敵や餌の取り方について教えてやった。

ところが、鯉太郎が赤美を連れて泳ぐと、川がいくら濁っていても目立つことは明らかだった。鯉太郎はすでにブラックバスに捕食されない大きさになっていたが、赤美はかっこうの餌になりかねなかった。何度かブラックバスに襲われ捕食されそうになった赤美を見て、鯉太郎はブラックバスを全滅させたいと思った。

そこで次の繁殖期に、鯉太郎はブラックバスの産卵床を襲うことにした。バスの卵は川の浅場にむき出しのままになっているが、それをオスのバスが守っている。鯉太郎が卵に近づくと、バスは鯉太郎に向かって突進し、口を大きく開けて噛みついてきた。

ただバスの卵を食べるのではなく、その子孫を全滅させることよって、赤美を守るという強い意志があるので、鯉太郎はひるまなかつた。バスにいくら噛みつかれても、鯉太郎は川床の卵を食い漁った。ほとんどの卵が食べられてしまうと、バスはあきらめて去っていった。

鯉太郎がいくつものバスの産卵床を襲って卵を食い漁るのを見て、ほかの黒鯉たちも集団でバスの産卵床を襲うようになった。バスの卵は美味しいからである。卵を守るのが親バス一尾だけであるのに対して、卵を襲う鯉は何尾もいた。その中には、鯉太郎よりもはるかに大きな鯉もあり、ブラックバスが対抗するのは無理だった。さらに、鯉が襲うときに、ウグイやオイカワもこぼれた卵を狙いだした。結局、川の中でバスの卵はほとんど食いつくされることになった。

バスの卵をすべて滅ぼしても、親魚は生き残るだろう。だから、バスの脅威はしばらくなくならない。しかし、鯉の寿命は何十年も続くので、いつかバスの親魚の寿命が尽きるのを見ることができはずだ。一方で、鯉太郎は毎年繁殖に参加して、自分の子を作り続けるつもりだ。鯉太郎の子はブラックバスやその他の天敵に狙われるだろうが、少しずつ増やして、一族を繁栄させることに成功したい。その中には、養魚池で出会った赤美のよ

うに美しい鯉も生まれるかもしれない。鯉太郎の夢は何十年も先の未来へ広がっていった。すっかり大きくなった鯉太郎には、もはや恐れる敵はいなくなった。そんな鯉太郎は夜になると水面近くに浮上して月を見るのが楽しみになった。なぜ、月は満ち欠けを繰り返す、太陽と違う動きをするのだろうか。月にも生物がいて、鯉太郎と同じような運命を辿るのだろうか。いくら考えても、わからないことばかりであった。

それでも鯉太郎は、自分が経験したことについては、反省したり助言したりすることができるように感じていた。

正平の水槽は小さすぎるから、庭に池を造ってやろう。穴を掘って、ブロックとレンガとコンクリートで固めれば、美しい池ができるはずである。循環式の浄化装置もつけて、ベランダから池を眺めることができれば、お母さんに臭いと言われなくてすむはずだ。そして、美しい鯉や金魚と池を見ていれば、正平ももっと心の優しい人間になるだろう。それこそ、おじいちゃんの好意に報いることになるはずだ。

料亭のおかみには、もう一度店を盛り上げてほしいと思った。建物は老朽化していても、ほかの飲食店よりもはるかに美味しい料理を提供すれば、客は集まるはずである。毎朝、自分自身で漁港の市場に出かけて、新鮮な魚を入手する。野菜は生産者と契約して、その日に採れたものを使うことにする。メニューは食材に応じて考える。ほかの料亭との違いを見せるために、肉料理や洋風料理も提供する。せっかく多くの錦鯉がいるのだから、池をもっと大きくして餌も十分にやれば、鯉も成長して美しくなるだろう。従業員を増やして、一日中仕事があるようにすれば、皆が幸せになるはずだ。

錦鯉の養殖業者に対しては、自分の生みの親であることに感謝するけれども、あまりに多くの稚鯉を死滅させることを改善してほしいと思った。錦鯉は人間に観賞されるために、人間によって作り出された品種である。だから、容姿と将来性で評価されるのは仕方がないかもしれない。それでも、見た目がばつとしない錦鯉でも、心を持っている。そのことはぜひ理解してほしい、と鯉太郎は思った。

了

本作品の背景、登場人物は実在するものではありません。